

(4) スポーツ

教材開発のポイント



着
想

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

スポーツならではの魅力を感じる素材

- ・ 児童生徒が日頃親しみ、地域に根付いているもの
- ・ 故人に限らず、実際に活躍するアスリートを素材にしたもの
- ・ 人物のチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩が感じられるもの

○ 素材の収集に当たって

原則、現存者は避けたいが、実際に活躍するアスリートの方が、児童生徒にとって身近であり、感動を与えられる面もある。故人や現役のアスリート、引退された選手など幅広い視点で収集に当たりたい。ただし、存命で社会的評価が定まっていない人物についての配慮は欠かせない。また、地域に根付いていることや偉業や記録のみにこだわらないことといった視点も大切である。

○ 素材の選定に当たって

偉業や記録といった事実に基づきつつも、その背景にあるチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩に触れることや結果に至るまでの地道な努力などのプロセスを重視するといった視点は必要である。

(2) 情報の収集



探してみよう

実際に活躍する（した）選手に着目

- ・ 肖像権、著作権の確認と了承
- ・ 関係者（アスリート本人、家族など）へのインタビュー

スポーツの情報収集においては、当時の写真や映像の収集が欠かせないことから、特に肖像権や著作権に留意しなければならない。

情報の収集に当たっては、本人や家族、深く関わった方に直接聞く中で、不撓不屈といった「自分自身に関すること」とともに、家族やライバル、

道具（シューズ等）製作者などに対する感謝など「他の人とのかわりに関すること」などの視点を大切にし、様々な思いを推し量っていきたい。また、写真や映像、業績にまつわるものについて、実物が現存するかどうか、借用は可能かどうかなどの確認もしておきたい。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

チャレンジ精神や力強い生き方、苦悩に留意

- ・ 事実（記録）の背景にある真実に着目
- ・ 児童・生徒の対象スポーツにおける経験の有無、興味・関心に留意
- ・ 必要に応じた補足説明（スポーツ用語の補足説明、年表等を作成）

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいの設定に当たっては、記録を出したからすばらしいのではなく、その記録を出すために、その人物が行ったこと（真実）に着目する必要がある。

スポーツの場合は不撓不屈になりやすいが、個性の伸長や友情等、多様な価値に触れさせたい。特に感謝という視点は大切にしたい。なお、小学校高学

年以降では、理想主義的な思考を大切に未来への夢や希望をはぐくめるよう留意したい。

構成・推敲

**② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する**

把握内容としては、対象スポーツにおける体験の有無、種々スポーツに対する興味・関心などが考えられる。また、児童生徒がアスリートをめざすための教材開発ではないことに留意しなければならない。スポーツに対して苦手意識をもつ児童生徒もいることから、「体力づくり」の活動等を通して、苦手意識の中身を把握することも一つの方法である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物や状況の設定は、児童生徒が体験活動や日常生活等を振り返られるなど、児童生徒にとって身近な行為が望まれる。例えば、スモールステップで目標をもって努力する姿などが考えられる。ただし、人物の高い価値観や生き様に純粋に感動させる場合も効果的であることには留意しておきたい。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

人物のチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩等などとともに、夢や希望が児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。目標（夢）ができ、それが達成されるまでのプロセスに共感できるような場面設定が必要である。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

スポーツの良さを象徴するものやスポーツの特質に関するものを盛り込んで表現することが大切である。例えば、「負けてしまいました。・・・くやしなみだが出てきました。」（開発例1）「練習を黙々とこなす日々が続きました。」（開発例2）などの汗、涙、緊張感、勝敗、爽やかさなどを主人公が見つめる風景で表現するといった工夫も考えられる。また、スポーツ用語について、児童生徒の発達の段階や実態に応じて、理解が難しい場合には、補足説明を加える必要がある。さらに、必要に応じて年表を挿入していくことも考えられる。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

オリンピックでメダルを獲得した、新記録を樹立した等、取り上げたアスリートの実績や記録が注目されやすいが、その結果の羅列にならないように留意することが大切である。ねらいに迫るために必要なもの以外は思いきって削除したい。

（４）授業の実施**実践してみよう****効果的な展開**

- ・ アスリート本人の声などの活用
- ・ 体験を想起できる場面の工夫
- ・ 話題性への着目

スポーツは臨場感が効果をもたらすことから、映像や写真、ビデオレターやテレビのインタビュー中の言葉等の活用が考えられる。ただし、情報の多さではなく選り抜かれた情報の提示が想像をふくらませる上で効果的な場合もあることに留意したい。また、導入や終末に体験活動を想起する場の工夫も考えられる。オリンピック開催や全国大会優勝などの話題性も考慮に入るとよい。

（５）体制・環境づくり**充実させよう****心身の調和的発達の促進**

- ・ 体力づくりとの関連

運動する児童生徒とそうでない児童生徒の二極化等が深刻な現在、体力づくりとの関連を図り、運動する楽しさや喜びを味わわせていく体制・環境をつくりたい。そのことにより、児童生徒の主人公のスポーツに対する思いへの共感が一層促され、ねらい

に含まれる道徳的価値や生き方についての自覚を深めていけると考えられる。